# 2021 年度

# 修士論文題目

Riemann 対称空間上における測地線の簡約部分 Lie 代数への射影に対する有界性

―低階数・低次元の場合―

学生証番号 45-196010

フリガナ オクダ タカコ

氏名 奥田 堯子

# 目次

導	入 .			2
謝	辞 .			2
1			本的な補題	
		1.1	記号の設定	3
2			主定理の証明	
		2.1	具体例: 実階数 1 の古典型単純 Lie 群	3
		2.2	$G$ の実階数が $1$ の場合 $\dots$	6
参	考文i	献		6

### 導入

G を非コンパクトな実半単純 Lie 群,K を G の極大コンパクト部分群で G の Cartan 対合  $\Theta$  に対して  $K = \Theta K$  なるものとするとき,G/K は  $\mathfrak g$  の Killing 形式 B から定まる Riemann 計量 によって Riemann 多様体の構造を持つ。  $\mathfrak g = \mathfrak k \oplus \mathfrak p$  を  $\Theta$  の微分  $d\Theta$  による  $\mathfrak g$  の Cartan 分解とするとき,G/K は  $\mathfrak p$  と微分同相であり,G の単位元の G/K での像 eK を通る G/K の極大測地線は B(X,X)=1 なる  $X\in \mathfrak p$  によって  $e^{tX}K$ , $t\in \mathbf R$  と書ける。H を G の非コンパクトな部分 Lie 群で, $H=\Theta H$  を満たすものとし, $\mathfrak p$  での B に対する  $\mathfrak h\cap \mathfrak p$  の直交補空間を  $\mathfrak h^\perp\cap \mathfrak p$  とする。測地線  $e^{tX}K$  の  $\mathfrak h\cap \mathfrak p$  成分と  $\mathfrak h^\perp\cap \mathfrak p$  成分への分解を与える定理として次の定理が知られている。

#### 定理 [Kob89, Lemma 6.1]

 $\pi: (\mathfrak{h} \cap \mathfrak{p}) \oplus (\mathfrak{h}^{\perp} \cap \mathfrak{p}) \ni (Y, Z) \mapsto e^{Y} e^{Z} K \in G/K$  は上への微分同相である.

この定理を用いて  $X \in \mathfrak{p}$  に対し, $(Y(X), Z(X)) := \pi^{-1}(e^X \cdot K) \in (\mathfrak{h} \cap \mathfrak{p}) \oplus (\mathfrak{h}^{\perp} \cap \mathfrak{p})$  と定義すると,任意の  $t \in \mathbf{R}$  に対して  $e^{tX}K = e^{Y(tX)}e^{Z(tX)}K$  である.

G=SU(1,1), H=SO(1,1) とするとき, $t\in \mathbf{R}$  に対し,Y(tX) は図 1 に図示するような幾何学的な意味を持つ.図 1 は Poincaré 円板における測地線  $e^{tX}K$  (赤色の斜め線) とその上の一点  $e^{tX}K$  から eK の H 軌道 (中央の直線) に下ろした垂線 (青色の円弧) の足が  $e^{Y(tX)}K$  である.

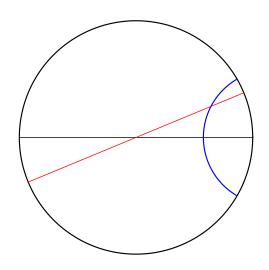


図 1: Poincaré 円板における Y(tX) の幾何学的意味

本論文では  $Y(\mathbf{R} X) := \{Y(tX) \mid t \in \mathbf{R}\}$  の有界性について考察し、次の結果を得た.

定理 G が実階数 1 のとき、 $Y(\mathbf{R} X)$  が有界であることと X=0 または  $X \in \mathfrak{p} \setminus \mathfrak{h}$  であることが 同値である.

## 謝辞

### 1 設定と基本的な補題

#### 1.1 記号の設定

本論文の基本的な設定は次のとおりであり、この他に必要な条件は都度明示することとする.

#### 記号と定義 1.1

- G を非コンパクト実半単純 Lie 群, H を G の部分 Lie 群で, G の Cartan 対合  $\Theta$  に対して  $\Theta H = H$  なるものとする.
- $\mathfrak{g} \coloneqq \operatorname{Lie} G$ ,  $\mathfrak{h} \coloneqq \operatorname{Lie} H$  とし, $\mathfrak{g} = \mathfrak{k} \oplus \mathfrak{p}$  を  $\theta \coloneqq d\Theta$  による Cartan 分解とする.
- e を G の単位元とし、 $o_K := eK \in G/K$  とする.
- B(-,-) を  $\mathfrak g$  の Killing 形式とし、 $\mathfrak h^\perp \cap \mathfrak p \coloneqq \{W \in \mathfrak p \mid \text{任意の } Y \in \mathfrak h \cap \mathfrak p \text{ に対して } B(Y,W) = 0\}$  とする.

以下の定理 1.2 を用いて, $X \in \mathfrak{p}$  に対し, $(Y(X), Z(X)) := \pi^{-1}(e^X \cdot o_K) \in (\mathfrak{h} \cap \mathfrak{p}) \oplus (\mathfrak{h}^{\perp} \cap \mathfrak{p})$  と定義する.

#### 定理 1.2 [Kob89, Lemma 6.1]

 $\pi: (\mathfrak{h} \cap \mathfrak{p}) \oplus (\mathfrak{h}^{\perp} \cap \mathfrak{p}) \ni (Y, Z) \mapsto e^{Y} e^{Z} \cdot o_{K} \in G/K$  は上への微分同相である.

ここで、 $Y(\mathbf{R}X)$  の有界性について、次の予想が小林俊行氏によって立てられた。

#### 予想 1.3 (by T. Kobayashi)

ベクトル空間としての分解  $\mathfrak{p}=(\mathfrak{p}\cap\mathfrak{h})\oplus(\mathfrak{p}\cap\mathfrak{h}^{\perp})$  に対応して  $X=X_1+X_2$  と分解すると,  $\mathfrak{p}_{H.\mathrm{bdd.}}=\{X\in\mathfrak{p}\mid [X_1,X_2]\neq 0 \text{ or } X_1=0\}$  である.

ここで、 $Z(\mathbf{R}X)$  の有界性については次の定理が知られている.

#### 定理 1.4 [Kob97, Lemmma 5.4]

 $X \in \mathfrak{p}$  に対し、 $||Z(X)|| \ge ||X|| \sin \varphi(X, \mathfrak{h} \cap \mathfrak{p})$  である.

ここに  $\varphi(X,\mathfrak{h}\cap\mathfrak{p})$  は X と  $\mathfrak{h}\cap\mathfrak{p}$  の元がなす角度の最小値  $0 \leq \varphi(X,\mathfrak{h}\cap\mathfrak{p}) \leq \frac{\pi}{2}$  であり,  $X \in \mathfrak{p} \setminus \mathfrak{h} \iff \varphi(X,\mathfrak{h}\cap\mathfrak{p}) \neq 0$  である.

つまり  $X \in \mathfrak{p} \setminus \mathfrak{h}$  ならば  $||Z(tX)|| \to \infty$ ,  $|t| \to \infty$  である.

## 2 具体例と主定理の証明

#### 2.1 具体例:実階数1の古典型単純 Lie 群

命題 **2.1** G = SO(1,n), SU(1,n), Sp(1,n), H = SO(1,1), n > 2 に対して予想 1.3 は正しい.

$$G=Sp(1,2)$$
,  $\mathfrak{h}=\mathbf{R}egin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$  の場合にのみ示す.その他の場合も全く同様の議論である.

命題 **2.2** G = Sp(1,2), H = SO(1,1),  $X \in \mathfrak{p}$  に対し,  $Y(\mathbf{R} X)$  が有界  $\iff X \in \mathfrak{p} \setminus \mathfrak{h}$  or X = 0 である.

ただし,
$$H$$
 は  $G$  の左上に入っている.すなわち, ${
m Lie}\,H=\mathfrak{h}={f R}\,A,\ A\coloneqq egin{pmatrix} 0&1&0\\1&0&0\\0&0&0 \end{pmatrix}$  とする.

記号と定義 2.3 H を四元数体とする.  $Sp(1,2)/Sp(1) \times Sp(2) \simeq \{(z_1,z_2) \mid z_1,z_2 \in \mathbf{H}, \mid z_1\mid^2 + \mid z_2\mid^2 < 1\} =: \mathbf{H} \, \mathbb{H}^2$  である. これは自然表現  $Sp(1,2) \curvearrowright \mathbf{H}^2$  の  $^t(1,0,0)$  軌道を考え,第 2,第 3 成分に第 1 成分の逆数を右からかけた空間が  $\mathbf{H} \, \mathbb{H}^2$  と微分同相であるためであり, $Sp(1,2) \curvearrowright \mathbf{H}^3$ 

の 
$$^t(1,0,0)$$
 軌道の点  $\begin{pmatrix} z_0 \\ z_1 \\ z_2 \end{pmatrix}$  に対応する  $\mathbf{H}$   $\mathbb{H}^2$  の点を  $\begin{bmatrix} \begin{pmatrix} z_0 \\ z_1 \\ z_2 \end{pmatrix} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ z_1 z_0^{-1} \\ z_2 z_0^{-1} \end{pmatrix} \end{bmatrix}$  と書く.

愚直な行列計算により,次が示される.

補題 
$$\mathbf{2.4}\ \forall z,w\in\mathbf{H}$$
 に対し,  $\exp\begin{pmatrix}0&z&w\\\overline{z}&0&0\\\overline{w}&0&0\end{pmatrix}=\begin{pmatrix}\cosh r&*&*\\\frac{\overline{z}}{r}\sinh r&*&*\\\frac{\overline{w}}{r}\sinh r&*&*\end{pmatrix}$ , ただし  $r\coloneqq\sqrt{|z|^2+|w|^2}$ ,

である.

命題 2.2 の証明

 $X=0 \Rightarrow Y(\mathbf{R}X)=\{0\}$  と  $X\in\mathfrak{h}\setminus\{0\}$  のときに  $Y(\mathbf{R}X)$  が非有界であることは明ら

かであるから,
$$X \notin \mathfrak{h}$$
 の場合にのみ議論すればよい.つまり  $X = \begin{pmatrix} 0 & z & w \\ \overline{z} & 0 & 0 \\ \overline{w} & 0 & 0 \end{pmatrix} \in \mathfrak{p} \backslash \mathfrak{h}$ 

 $z,w \in \mathbf{H}$  s.t.  $|z|^2 + |w|^2 = 1$  を任意に 1 つ固定して議論して一般性を失わない、このとき、 $X \in \mathfrak{p} \setminus \mathfrak{h}$  より  $\operatorname{Re} z \neq \pm 1$  であることに注意する (Re:  $\mathbf{H} \ni a + bi + cj + dk \mapsto a \in \mathbf{R}$  とする).

G の Cartan 対合を  $\Theta(g)=(g^*)^{-1}$   $(g^*$  は g の共役転置)とするとき, $\Theta(e^{Y(tX)}e^{Z(tX)})\cdot o_K=e^{-Y(tX)}e^{-Z(tX)}\cdot o_K=\Theta(e^X)\cdot o_K=e^{-X}\cdot o_K$  より,「 $Y(\mathbf{R}\,X)$  が非有界  $\iff Y(\mathbf{R}\,X)\subset\mathbf{R}\,A$  が上に非有界」である.

したがって、 $Y(\mathbf{R}\,X)$  が非有界であるとき、列  $\{t_n\in\mathbf{R}\}_{n\in\mathbf{N}}$  で、 $s_n\to\infty$ 、 $n\to\infty$ 、ただし  $Y(t_nX)=s_nA$ 、なるものが存在する.

このとき, $\{|t_n|\}_{n\in\mathbb{N}}$  が有界  $\iff$   $\{e^{t_nX}\cdot o_K\}_{n\in\mathbb{N}}$  が有界ならば, $G/K\ni e^X\cdot o_K\mapsto (Y(X),Z(X))\in (\mathfrak{h}\cap\mathfrak{p})\oplus (\mathfrak{h}^\perp\cap\mathfrak{p}),\ X\in\mathfrak{p}$  が微分同相であることから  $\{s_n\}_{n\in\mathbb{N}}$  も有界である. 従って対偶より  $\lim_{n\to\infty}s_n\to\infty$  ならば  $\lim_{n\to\infty}|t_n|\to\infty$  である. 補題 2.4 より,

$$e^{s_n A} e^{Z(t_n X)} \cdot o_K = \begin{pmatrix} \cosh s_n & \sinh s_n & 0 \\ \sinh s_n & \cosh s_n & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{bmatrix} 1 \\ \pm \overline{z} \tanh |t_n| \\ \pm \overline{w} \tanh |t_n| \end{bmatrix}$$
$$= \begin{bmatrix} \cosh s_n \pm \overline{z} \tanh |t_n| \sinh s_n \\ \sinh s_n \pm \overline{z} \tanh |t_n| \cosh s_n \\ \pm \overline{w} \tanh |t_n| \end{bmatrix},$$

複号は  $t_n$  の符号  $\pm$  と同順,である.このとき  $\lim_{n \to \infty} anh s_n = 1 = \lim_{n \to \infty} anh |t_n|$  と  $\operatorname{Re} z \neq \pm 1$  に注意すると次を得る. 具体的な計算は後述する.

$$\lim_{n \to \infty} (\sinh s_n \pm \overline{z} \tanh |t_n| \cosh s_n) (\cosh s_n \pm \overline{z} \tanh |t_n| \sinh s_n)^{-1} = 1$$
 (2.1)

である.

\* Euclidean な内積の値を 
$$I_n$$
 とすると、 $\lim_{n\to\infty}I_n=1$  である. しかし、 $\begin{pmatrix} 0\\0 \end{pmatrix} \in \mathbf{H}\,\mathbb{H}^2$  から  $\begin{pmatrix} 1\\0 \end{pmatrix} \in \mathbf{H}\,\mathbb{H}^2$  へのベクトルと、 $\begin{pmatrix} 0\\0 \end{pmatrix} \in \mathbf{H}\,\mathbb{H}^2$  から  $e^{W(t_nX)}\cdot o_K\in \mathbf{H}\,\mathbb{H}^2$  なっていない。 これは だなす Euclidean なは ほんしょ

 $\mathbf{H}\mathbb{H}^2$  へのベクトルがなす Euclidean な内積の値  $J_n$  は,

$$W(t_nX) \in \left\{ \begin{pmatrix} 0 & z_1 & z_2 \\ \overline{z_1} & 0 & 0 \\ \overline{z_2} & 0 & 0 \end{pmatrix} \middle| z_1, z_2 \in \mathbf{H}, & \operatorname{Re} z_1 = 0 \right\}$$
 であることと、補題  $2.4$  から  $\operatorname{Re} J_n = 0$ 

以上より 「 $X \in \mathfrak{p} \setminus \mathfrak{h} \Rightarrow Y(\mathbf{R} X)$  有界」, したがって 命題 2.2 を得る.

命題 2.2 の計算:

具体的に計算すると,

$$\lim_{n \to \infty} |(\sinh s_n \pm \overline{z} \tanh|t_n|\cosh s_n)(\cosh s_n \pm \overline{z} \tanh|t_n|\sinh s_n)^{-1} - 1| \qquad (これが = 0 を示せば良い)$$

$$= \lim_{n \to \infty} \left| \frac{(\tanh s_n \pm \overline{z} \tanh|t_n|)(1 \pm z \tanh|t_n|\tanh s_n)}{|(1 \pm \overline{z} \tanh|t_n|\tanh s_n)|^2} - 1 \right|$$

$$= \lim_{n \to \infty} \frac{|(\tanh s_n \pm \overline{z} \tanh|t_n|)z' - (1 \pm \overline{z} \tanh|t_n|\tanh s_n)z'|}{|(1 \pm \overline{z} \tanh|t_n|\tanh s_n)|^2}, \qquad z' \coloneqq 1 \pm z \tanh|t_n|\tanh s_n$$

$$= \lim_{n \to \infty} \frac{|(1 - \tanh s_n)(-1 \pm \overline{z} \tanh|t_n|)z'|}{|(1 \pm \overline{z} \tanh|t_n|\tanh s_n)|^2}$$

$$= \lim_{n \to \infty} \frac{|(1 - \tanh s_n)(-1 \pm \overline{z} \tanh|t_n|)z'|}{|(1 \pm \overline{z} \tanh|t_n|\tanh s_n)|}$$

であり,  $0 < \min |1 \pm \operatorname{Re} z| \le |(1 \pm \overline{z} \tanh |t_n| \tanh s_n)| \le \sqrt{2^2 + 1^2} = \sqrt{5}$ と  $\min \{|-1 \pm \operatorname{Re} z|\} \le |t_n|$ 

 $|-1 \pm \overline{z} \tanh|t_n|| \leq \sqrt{5}$  であることから,

$$0 = \lim_{n \to \infty} (1 - \tanh s_n) \frac{\min\{|-1 \pm \operatorname{Re} z|\}}{\sqrt{5}} \le \lim_{n \to \infty} \frac{|(1 - \tanh s_n)(-1 \pm \overline{z} \tanh |t_n|)|}{|(1 \pm \overline{z} \tanh |t_n| \tanh s_n)|}$$
$$\le \lim_{n \to \infty} (1 - \tanh s_n) \frac{\sqrt{5}}{\min\{|1 \pm \operatorname{Re} z|\}} = 0$$

より, (2.1) が成り立つ.

#### 2.2 Gの実階数が1の場合

定理 2.5 G を実階数 1 の実半単純 Lie 群とするとき, 予想 1.3 が成り立つ.

#### 定義 2.6 [Ebe72a, Definition 1.3]

M が完備かつ非正曲率をもつ 1-連結 Riemann 多様体であるとき,M を Hadamard 多様体といい,Hadamard 多様体 M が visibility manifold であるとは, $\forall p \in M, \forall \varepsilon > 0$  に対し,ある $r(p,\varepsilon) > 0$  が存在して,測地線  $\gamma \colon [t_0,t_1] \to X$  が  $d_M(p,\gamma(t)) \ge r(p,\varepsilon)$ , $\forall t \in [t_0,t_1]$  ならば, $\angle_p(\gamma(t_0),\gamma(t_1)) \le \varepsilon$  であることである.

#### 図を入れる

#### 定理 2.7 [BH99, p. 296, 9.33 Theorem], originally [Ebe72b, Theorem 4.1]

 $\exists C \subset M \text{ s.t. } M = \bigcup \{f(C) \mid f \in \text{Isom}(M)\}$  なる Hadamard 多様体 M に対し、次は同値である。

- (i) M は visibility manifold である.
- (ii) 全測地的な部分 Riemann 多様体  $M' \subset M$  で  $\mathbf{R}^2$  と等長同型なものが存在しない.

ここで Riemann 対称空間は Hadamard 多様体であり、定理 2.7 の (ii) は G の実階数が 1 以下であることと同値である。 したがって G の実階数が 1 の場合 G/K は visibility manifold であり、G=SU(1,2)、H=SO(1,1) の場合の証明と全く同様にして背理法により予想 1.3 が示される。

## 参考文献

- [Ber88] J. N. Bernstein, On the support of Plancherel measure, J. Geom. Phys., Vol. 5, n. 4, 1988, pp. 663–710
- [BBE85] W. Ballmann, M. Brin and P. Eberlein, Structure of manifolds of nonpositive curvature. I, Ann. of Math. (2), Vol. 122, No. 1, 1985, pp. 171–203
- [BH99] M. R. Bridson and A. Haefliger, Metric Spaces of Non-Positive Curvature, Grundlehren der mathematischen Wissensschaften, Vol. 319, Springer, 1999
- [Borel–Ji] A. Borel and L. Ji, Compactifications of Symmetric and Locally Symmetric Spaces, Mathematics: Theory & Applications, Birkhäuser Boston, 2006

- [**Ebe72a**] P. Eberlien, Geodesic Flows on Negatively Curved Manifolds I, Ann. of Math. (2), Vol. 95, pp. 492–510, 1972
- [**Ebe72b**] P. Eberlien, Geodesic Flow in Certain Manifolds without Conjugate Points, Trans. Amer. Math. Soc., Vol. 167, pp. 151–70, 1972
- [EO73] P. Eberlein and B. O'Neill, *Visibility Manifolds*, Pacific J. Math., Vol. 46, No. 1, 1973, pp. 45–109
- [Kob89] T. Kobayashi, Proper action on a homogeneous space of reductive type, Math. Ann., Vol. 285, Issue. 2, 1989, pp. 249–263.
- [Kob97] T. Kobayashi, Invariant mesures on homogeneous manifolds of reductive type, J. Reine Angew. Math., Vol. 1997, No. 490–1, 1997, pp. 37–54